



春燈

2016
October

10 月号

主宰の句

安立公彦

夕爾忌や町空に立つ遠花火

蚊帳ありし頃の父母偲ばるる

幼児と氷菓分けあふ夕ごころ

荔枝実り窓一面を緑なす

一村の屋並を洗ふ野分かな



成瀬櫻桃子の句

たんぼ。ぼ。ぼや俯向くことに馴れて鈍

『風色』昭和四十八年

櫻桃子先生には一度だけお会いした事がある。穏やかな笑みと、ゆるりと構えたお姿が印象的な方であった。掲句は三十代の作である。不甲斐無い自分を「鈍」と切捨て、先に進まねばならないと言っ焦りが伝わってくる。感情をストレートに句にぶつける事が出来るのも若さなのだ。詩情豊かな作品が並ぶ中、ぼろっと零した本音のようなこの一句に心惹かれた。

矢口笑子

成瀬櫻桃子の句

浮寝鳥こころの奥は醒めてをり

「春燈」平成二年

何処の水辺をご覧になられたのであろうか。水の星といわれる地球であるが、島国日本の水辺には豊かな自然があふれている。古今集の昔より、水鳥を詠んだかずかずの歌がある。

この句は、首を翼の闇に包み、身じろぎもせぬ浮寝鳥を抒情的に表現している。心の奥に愛と憂いを内包しながら、声に出せない身の苦しみを詠出した。

神田恵琳

燈下集



○ 宮田 豊子

羅を拵げ欠席茶会かな
花芥子の赤きを見むと回り道
風鈴の風選ぶこと許されず
雨季長し木々に重たき雫かな
安曇野よりおやき届きて梅雨明くる

○ 佐々木 新

梅雨明の光と風をねやかにかな
手花火やけむりを追つて兒ら走る
片泊り瀬音しづかに網戸越し
草刈やペンを鎌への少年期
側道に駒草たづねトムラウシ

○ 呂 秀文

颯爽と白靴はいて杖ついて
橋おぼろため息橋のガス灯
誘ふ氣のさらさらになし香水ポイズン
赤づきん水牛避けて回り道

風鈴の一喜一憂風任せ

○ 横田 初美

露地裏へ逃げゆく声や大夕立
祭太鼓胸板を打つペンダント
廃校の空へ連打の花火かな
港町海の色より秋めけり
バスを待つ列の間合を秋の風

○ 吳 文宗

川の辺のあぢさゑ祭色泛ぶ

泰山木の花招くがにひるがへり

喜雨の中未知との出合ひ待たれぬし

日は好日ならむや藤寝椅子

顛頂の髪が細しや吹流し

○ 陳 妹蓉

梅雨晴間少しの嘘をつきにけり

竹植うる日領遺構のミニデパート

老鶯や繰返しきくセレナーデ

羽ばたきてこぼれ落ちたる燕の子

水牛の目を細め居る埤圳風呂

○ 井上 正子

梅雨明や綿菓子に似る白き雲

陽光の眩しき機影梅雨の明

遠花火最晩年の安らぎよ

「オペラ座の怪人」哀し街極暑

百歳の知人を祝す天の川

○ 三代川 玲子

たをやかに蛇泳ぎゆく淀みかな

木道の乾きし音や黄すげ原

湿原に遊ぶ父子の捕虫網

終電のとうに過ぎたる星涼し

海風や舳先を戻す施餓鬼舟

○ 豊谷 青峰

盆東風や離島へ通ふカーフェリー

六地藏の足元洗ふ土用波（釜崎）

盆波や世界遺産へ着きし船（重慶島）

夜光虫旅の一日を樂しめり

ぶらぶら節の芸者の提げし土用餅

○ 高埜 良子

小暑来る風に手心ある木蔭

涼しさや垣根越しより水の音

金魚玉顔寄せ合うて目と目と目

香水の魔力をひめてをんなの背

風鈴市音を違へて江戸・南部

○ 吉川 隆

七夕やまたねとハグし電車へと

路地裏のカレーの匂黒揚羽

尋ね来るは夏蝶のみの日なりけり

知る限りの抒情歌うたふ夜の秋

この話二度目なるかや心太

○ 本田 保

太宰忌の命失ふ程の恋

桜桃忌絶筆となる「ゲットバイ」

あでやかに咲き誇りたる七変化

時の日や時間はよどみなく進み

お別れの涙のハンカチーフかな

○ 瀬戸 峰子

露草の瑠璃鏤めて荒野原

露草や地に俯して青極む

掌囀ひに蛩相見し日の遠し

万緑の中に天突く杉の鉾

掃除せるあとへ静かに松落葉

○ 今井 弘雄

夕端居風に有涯をゆだねけり

盛塩や上七軒の片陰り

燃え残る芋殻の未練夜の風

友垣のほぐれて久し星まつり

星帰る森のしとねや今朝の秋

○ 竹内 慶子

サーファーに良き波きたり由比ヶ浜

そばかすの似合ふ少女やソーダ水

父祖の地に母の忌修す半夏かな

手づくりの鮎寿司並べ湖の寺

江戸前の穴子に替ふる土用かな

○ 清水 美子

相生の松に掛かりし蛇の衣

落青袖始末に困る男の背

桑の実や嘘つく口の赤き舌

筋力体操まじめに励み一夜酒

巴里祭金髪を梳くお六櫛

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

月明の湖ふさぐ影土用富士

前山は利久鼠に朝曇

そばへ過ぐ蓮の花びら滴おき

かはたれの急に浮き出づ半夏生

紫陽花の七色の旅終はる頃

○ 坂入妙香

蕩け出すバターのやうな朝曇

菩提寺の墓を彩るさるすべり

冷索麵過ぎし記憶を逃すまじ

涼しさや百日紅の床柱

透明な海月のダンス見て飽かず(すみだ水族館)

○ 土江比露

朝曇り海鳥止まる石鼎碑

ほととぎす風ひそみぬる遺跡谷

半夏生昼を灯してひとり住む

夏の霧関門海峡汽笛鳴る

海よりの風に玉解く芭蕉かな

○ 永井恵子

青鳶の被ふ洋館窓明り

故郷の青田の風を吸ふ妹や

山越えの眼下薩摩路梅雨明くる

蝸や牧水歌碑の白き文字

花火果て星座次第に現るる

○ 横山さくら

頬かする細き風の音秋に入る

横顔に見入る祈りや震災忌

秋の蟬声高らかに斉唱す

いつの日のいつの記憶か秋の蟬

ふんはりと干さるる蒲団や柿日和

春燈の句

安立 公彦選



生きてゐる証の汗や病める妻

福島 室井津与志

草雀るスイッチバックの汽車の道

大夕立傘を小脇に男消ゆ
花火果て硬き川面の残りをり

被爆地や群飛ぶ蜻蛉影消えて

鎮魂の靖国の杜秋の蟬

朝顔の白きはむるや五輪の日

軍歌なほ心にのこる終戦日

遠来の友より届く新茶かな

千葉 大湊 栄子

独り居に虫の音もまた友なりき

新涼の水脈ひきゆくや遊覧船
しんがりは町会長や踊の輪

棚経の僧侶バイクを飛ばしけり

払暁や鳥鳴き交はす夏木立
籐椅子や戦火に消えし愛読書

京老舗のれんの藍も秋めけり

青りんごサイクリングの笑ひ声

ゴンドラ漕ぐ男ダビデ似日焼せる

神奈川 河本由紀子

白緋の白皙長身美形かな

凌霄の末の一花は日に背き

谷・根・千に千代紙を買ふ梅雨の晴

梅雨明は遅くなるとの報せ聞く
六輔も巨泉も逝きて冷夏呼ぶ

斜陽の街の古き館や大西日

終戦忌戦没悼む日となりぬ

土用太郎土用次郎や存ふる

東京 小林 文良

このごろの雷癖や雲一朵

遠花火その後消息絶ゆるひと

東京 鈴木としお

神奈川 丸山 允男

神奈川 落合 小枝

余言

安立公彦

半跏にて涼しく在す仏かな

鷹崎由未子

「半跏」は、半跏趺坐の略。即ち片足を他の膝頭の上に組んで座ること。仏像彫刻に半跏思惟像という形がある。京都広隆寺と奈良中宮寺の弥勒菩薩半跏思惟像はことに名高い。ともに飛鳥時代の作品、国宝である。この姿は、釈迦の樹下思惟の像に由来しているという。

手許の文庫版仏像本の中に、この両像が、カラーで見開きに載っている。いつ見てもその姿に感動を覚える。

作者の見る「半跏」はその本尊だろう。仏像に向かう思いは人それぞれだ。その何れをも仏像は受けとめてくれるよう。この句の「涼しく在す」は、感動の極みに零れる思いである。静けさの中に凜とした姿の徹る作品だ。遙か以前に拝んだ広隆寺の半跏思惟像を思い出す。

山鳩のながくは鳴かず梅雨ふかし

鈴木 直充

今年の梅雨は長かった。「梅雨」という季節は、人の思いをより深い思惟に導く時間の連続である。一木一草の姿にもその思いは増す。

山鳩が鳴いている。別名雉鳩とも呼ばれる。その鳴声には鶯のような流れはない。くぐもった単調な声は、気が付くと終わっている。作者はその山鳩のくぐもり鳴く声を、知らずの内に梅雨のリズムとして聞いている自身に思い至るのだった。梅雨はいつ果てるともなく続く。

十七文字の内容は、時として数十枚の文章にも勝るものを持つ。この句にその一つの例を見るのだ。

気負ひ無く語る目元や遠花火

林 紀夫

「戸辺信重君を悼む」の前書がある。信重さんの逝去は五月二十七日だった。奥さんからの手紙には、発熱とともに力尽きました、とあった。「春燈」への出句は三月号が最後である。静謐な句を作る人だった。へ幼な子の瞳の中の柿若葉（25年7月）、へ日の盛やさしき色よ百日紅（同年10月）、腰痛の句がある。へ腰痛の窓に蜻蛉の山だより（26年12月）、へぼたんは目の高さよし車椅子（27年7月）。体調の自覚は今年に入り句に現れる。へ朝寒や遠山思ひ身じたくす（28年1月）、へ久々の聖夜満月

天をゆく(同年3月)。かつて編集でも活躍された。

この句、信重さんを良く知る作者ならではの句である。燈下集同時入集。無口同土気があった、と作者。しかしそれは互いの不言実行の謂であらう。惜しい作家だった。

羅の背筋にみだれなけれり 中野さき江

この句の初見は七月本部句会だった。野澤節子は俳句鑑賞文の中で、「女性自身も羅を着ると、ことさらに女を意識する」と書いている。「羅」にはそれだけの魅力があるのだ。もとよりその魅力は自身の着こなしによるもの。

この句、「羅の背筋」がいい。更に「背筋にみだれなけれりけり」がいい。本部句会報に、「気品のある和服女性の姿を彷彿とさせる」と書いたが、その思いは今も変わらな。夏の情趣の一つの景を為す句である。

亡き夫と短夜の夢語り合ふ 平野加代子

夫君の逝去は六年前の八月。作者はその七回忌法要にさせてご主人への心の籠った追悼記を上梓した。主文はご主人による業務管理の総括とも言うべきレポート、それに伴うカラー写真の数々。加えて作者の追悼記と、充実した内容である。追悼記に配された作者の悼句が善い。へ朝焼の彼方へ夫の逝きにけり、へ春雪や前へ進めと天の声、他。更に長女敬子さんの作者を思う一文が見事だ。

この句、「語り合ふ」とあるが「短夜の夢」である。語

り尽くせない思いがある。しかし時間は充分にある。この追悼記はこれからの作者の充分な「標」となる。

いかづちの見する闇夜の深さかな 久保 久子

「雷」は、雲と雲との間、雲と地表との間に生じる放電現象だが、この句に見る「いかづち」には、天界の意志とも言うべき力を感じる。「いかづちの見する」という措辞が良い。雷鳴の轟きが人の歩みを止める。更に「闇夜の深さかな」が、人智をはるかに越した大自然の力をありありと示す。写生と心象の渾然一体となった句である。

墓詣で墟墓にも供華を頒ちけり 赤岡 茂子

「墟墓(きよぼ)」は荒れ果てて申う人のない墓石。あちこちの墓地に、今こういう墟墓が多くなっている。

盃蘭盆に墓参りに訪れた作者。墓地の道を行くと、目差す墓石の近くにそういう墓を見る。墓は傾き、供華の台石は雑草に被われている。墓参の終わったあと、作者はその墟墓に立ち寄り、供華として持参した花の内、残した供花を墟墓に手向ける。手向け花である。以前はこういう墟墓にも折々供花を挿す人がいた。今はただ荒れるばかりだ。作者の行いはきつと天に届くだろう。